

## アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成24年度 実施計画書

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加看護大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学

### 2. 研究交流課題名

(和文)：タンザニアの母子保健改善に貢献する持続的な若手研究者の育成  
(交流分野： 母性看護・助産学 )

(英文)：Sustainable development of novice researchers who will contribute evidence based midwifery for the promotion of maternal child health in Tanzania  
(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.ap.slcu.ac.jp/mt5/asia-africa-jp/>

### 3. 採用期間

平成 23 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日  
(2 年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関：聖路加看護大学

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：学長・井部俊子

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：母性看護、助産学・教授・堀内成子

協力機関：

事務組織：聖路加看護大学事務局

#### 相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名：タンザニア

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：

(英文) School of Nursing・Professor・Sebalda LESHABARI

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association

(和文) タンザニア助産協会

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

タンザニアでは妊産婦死亡率が非常に高く、産科医療のアクセス・質の低さに関する問題が山積している。母子保健問題の改善という緊急性の高い社会的なニーズに対応すべく、母子保健を専門に研究教育活動ができる若手研究者の育成が急務であり、助産学専門の修士課程の設立が強く求められている。本研究交流では、「アジア・アフリカ助産研究センター」という共同研究拠点を形成し、交流を通して東アフリカ初となる助産学専門の修士課程をタンザニア・ムヒンビリ健康科学大学に設立する。

タンザニアと日本の助産教育の理念は、「エビデンスに基づいた安全な自然分娩を促進する」点において共通している。日本の助産高等教育は、聖路加看護大学大学院看護学研究科において、1983年度より修士課程が設けられており、助産学の教育者および研究者を数多く輩出してきた実績がある。本研究交流では、日本の持つ知識、人材や経験を移転するだけでなく、タンザニアの健康問題に合ったカリキュラム編成を行う。タンザニア国内で助産学専門の大学院教育を確立することによって、タンザニア人助産師が自国の保健問題改善に向け活動できる能力を育成し、タンザニアの母子保健分野の自立発展性を高めることを目指す。

またセミナー等学会会合を通し、設立する大学院修士課程の教員、助産師学校の教員グループや臨床現場の助産師にも学びの場を提供する。同時に日本の助産高等教育においても、助産師が国際的な視野を持ち、活動を展開する能力を養うことを目標としている。本研究交流で、日本人の若手研究者が国際的な活動の場やネットワークを広げ、今後共同研究などを行う基盤を作ることを目標としている。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

### 【研究協力体制の構築状況での目標達成状況】

前年度目標に挙げた通り、聖路加看護大学にアジア・アフリカ助産研究センターを立ち上げ、ビジョン、ミッション、概要を明確にし、相手国との協力体制の土台を築いた。本プロジェクトの周知活動の一環として、両国の研究者が南アフリカで開催された国際助産師連盟（International Confederation of Midwives）の三年毎大会に参加し、世界各国の研究者へ意見を求め、プロジェクトの質的充実を図った。

相手国コーディネーターであるセバルダ・レシャバリ氏を招聘し、タンザニアの母子保健・助産教育における課題をセミナーにて講演してもらうことで、相手国の現状に対する日本側研究者の理解を深めた。

タンザニア側研究者にも日本国の助産教育・実践を見学してもらうことで、日本における助産教育・実践をタンザニアの現状にどのように応用できるか、アイデアを構築し、協働で相手国側の助産修士課程カリキュラムを作成することができた。追って相手国拠点機関の看護学部長を招聘し、今年度後半から来年度にかけての共同研究活動や、案を作成した助産修士課程カリキュラムについて相手国側で承認を得るプロセスにつ

いて具体的に確認することができた。

これらの交流活動については、アジア・アフリカ助産研究センターのホームページやEメールによるニュースレターの配信、公開セミナーや関連記事の雑誌掲載を通じて広く周知することができた。

両拠点機関の学術協定は2009年に締結され、本事業により本格的な共同研究活動を開始した。事業初年度において順調に協力体制を構築することができ、今後の活動に向けて大きな成果が得られた。

### 【学術面の成果での目標達成状況】

事業初年度にあたり、今後の研究活動の基盤形成準備を行った。R-1では、助産修士課程のカリキュラム案を完成させ、相手国側のステークホルダーミーティングにおいてタンザニア国内の保健省、助産協会、医師会、教育者や臨床家の意見を求め、修正点を確認の上、出席者の承認を得た。これを受け、平成24年度早々にも相手国拠点機関の承認手続きを進める予定である。

今回のプロセスは、タンザニア国内初の助産修士課程を立ち上げるにあたり、大きな一歩であった。アフリカにおける助産師育成を目指す助産修士カリキュラムの共同開発プロセスについて、他の国家・機関への知見提供するため、日本で開催された国際保健医療学会で発表を行った (Yoko Shimpuku, Shigeko Horiuchi, Shebalda Leshabari, Miwako Matsutani, Hiromi Eto, Yasuko Nagamatsu, Michiko Oguro, Collaboration between Japanese and Tanzanian Midwives to Develop the First Midwifery Master's Course in Muhimbili University of Health and Allied Sciences, Tanzania: A Case Report. 第26回国際保健医療学会学術大会 第52回熱帯医学学会学術大会 合同大会. 東京大学: 2011年11月)。本カリキュラムの中心的なコンセプトである Women-centered Care に関する研究方法の文献レビューについても学術誌に投稿、査読中である。

R-2に関しては、日本側拠点機関修士課程を修了したタンザニア人若手研究者の海外学術誌投稿をサポートし、発表に至った (Frida Madeni, Shigeko Horiuchi, and Mariko Iida: Evaluation of a reproductive health awareness program for adolescence in urban Tanzania – A quasi-experimental pre-test post-test research, Reproductive Health 2011, 8:21 doi: 10.1186/1742-4755-8-21)。更に同研究者の次の研究計画である思春期学生への性教育プログラムを農村地区に応用する研究に際し、農村地区の選定、計画書作成、倫理審査の調整を行った。

### 【若手研究者養成での目標達成状況】

国際助産師連盟南アフリカ大会において、日本国側博士研究員がタンザニアで行った博士研究を発表し、同時に本事業の開始を公表した (Yoko Shimpuku, Mothers' Perceptions of childbirth experience at a hospital in rural Tanzania. ICM Triennial

Congress, Durban, South Africa. May 2011 : ref 472.)。多くのアフリカ系助産研究者が参加する大会において、アフリカの母子保健・助産活動に対する意見交換を行い、今後の研究活動における人的ネットワークの拡大につながった。

また、相手国側若手研究員を2名招聘し、日本側機関の助産教育課程や大学院教育制度、コクランレビューといった助産研究者の活動や日本のバースクリニックや助産院における活動を紹介した。人材が少なく出産の多いタンザニアにおいて、日本における実践をどのように応用可能か両国研究者間で意見交換を行い、強いインスピレーションを与えることとなった。

日本で開催された公開セミナーでは、タンザニア人研究者の発表を通じて、日本側若手研究者がタンザニアの母子保健・助産の実際を学ぶことができた。

### 【社会貢献での目標達成状況】

本事業の最終的な目的は、高い妊産婦死亡率の続くタンザニアにおいて、助産教育の向上のため大学院教育を実現し、Women-centered Care（女性中心のケア）、Evidence-based Practice（エビデンスに基づいた実践）の概念に沿った臨床助産ケアの改善と妊産婦の健康の改善を図ることである。タンザニアの高い妊産婦死亡率の問題は、臨床的なケアの質の問題にとどまらず、女性のジェンダーの問題、貧困、教育といった様々な因子が入り組んでおり、一朝一夕に改善するものではない。継続的にこの問題に取り組んでいくには、現地の助産・リプロダクティブヘルス研究者の持続的な育成が急務である。

これまで、タンザニアの助産師が修士課程で学ぶためには、海外の教育機関へ進学するほか手段がなく、経済的事情から、同国において海外留学の機会を得ることは困難であった。本事業を通じてムヒンビリ健康科学大学に助産修士課程が開設されることで、タンザニアの助産師が国内で進学可能となり、持続的な研究者育成へ貢献するだけでなく、ブレインドレイン（海外に優秀な人材が流出する問題）の改善に寄与すると考えられる。修士課程修了者は、高度臨床技術を得るだけでなく、研究、教育、マネジメントといった能力を養うことで、タンザニアの母子保健・助産分野の発展、拡大につながることを期待できる。

本年度作り上げた助産修士カリキュラムは、高度人材育成の第一歩であり、相手国研究者からも、多くのタンザニア助産師が進学を待ちわびているとの報告を受けている。母子保健・助産分野に課題を抱えるタンザニアの社会的に広く求められている事業であり、助産ケアの改善を望む多くの発展途上国に、意義の高い示唆を与えられたい。

## 7. 平成24年度研究交流目標

### 【研究協力体制の構築】

昨年度にはタンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の研究者を日本に招聘し、交流を重ね本事業の共通ゴールを確認、アジア・アフリカ助産研究センターの基盤を構築した。その

研究協力体制を更に強めるため、本年度は日本側研究者チームがタンザニア、ムヒンビリ健康科学大学を訪問、現地の出産施設や教育現場を視察し、タンザニアの助産の現状についてプロジェクトチーム全体で理解を深める。

### 【学術的観点】

共同研究に関して、R-1では助産修士課程カリキュラム案をムヒンビリ健康科学大学に提出し、承認を得る。また、日本側研究者チームがタンザニアを訪問する際、国際学術ワークショップを開催する。前年度タンザニア側教員を招聘した際、ブラジル JICA プロジェクト専門家経験者、毛利多恵子氏が講義した「Humanization of Childbirth」に非常に感銘を受け、同内容をタンザニア助産師たちに周知したいとの要望があったことから、修士課程の臨床指導者となる臨床家にもそのコンセプトを理解してもらう機会としてワークショップを開催し、教員・学生に加え現地の臨床家も招待する。題材を「What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference –」とし、参加者とのディスカッションセッションを通してタンザニアにおける “Humanization of Childbirth” の概念をまとめ、明らかになった概念を今後、助産修士課程のカリキュラムの中にも含める。この研究の承認を得るため、日本・タンザニア両側の倫理審査を提出する。

R-2では、日本側拠点機関を修了したタンザニア人助産師が昨年度までに思春期学生への性教育プログラムを農村地区に応用するための地区の選定、計画書作成を終え、タンザニア科学省への倫理審査を調整した。本年度は研究の承認を受けたのち、性教育プログラムを実施し、評価する。

### 【若手研究者養成】

本年度は日本側研究者チームがタンザニアを訪問するが、その際、参加研究者に加え、聖路加看護大学からも希望者を募り、国際保健、助産学に興味が高く、高い英語力を持つ学部生、大学院生を同行させる。アフリカの土地に足を踏み入れ、教育、出産の現場を見学する希少な機会を日本側の学生に提供する。

また、タンザニア側からも学部生、院生をワークショップに招待し、“Humanization of Childbirth” の概念分析の過程に参加する機会を提供する。タンザニア側にとっても若手研究者養成の貴重な機会となることが期待できる。

## 8. 平成24年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 23 年度	研究終了年度	平成 25 年度
研究課題名	(和文) タンザニアの助産若手研究者育成カリキュラム作成と評価				
	(英文) Curriculum development and evaluation of novice midwifery researchers in Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授				
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Sebalda Leshabari, School of Nursing, Professor				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉	モーリシャス 〈人／人日〉	計 〈人／人日〉
	日本 〈人／人日〉		(4/8)	1/5	1/5 (4/8)
	タンザニア 〈人／人日〉	0/0			0/0
	〈人／人日〉				
	合計 〈人／人日〉		(4/8)	1/5	1/5 (4/8)
	② 国内での交流		1/3 人／人日		
日本側参加者数					
6 名	(12-1 日本側参加研究者リストを参照)				
タンザニア側参加者数					
5 名	(12-2 相手国タンザニア側参加研究者リストを参照)				
( ) 側参加者数					
名	(12-3 相手国 ( ) 側参加研究者リストを参照)				

<p>24年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>昨年度までの過程(カリキュラム開発とステークホルダーミーティングの結果)について学会・学術誌等で発表する。具体的には、9月にモーリシャスで開催される the East, Central and Southern African College of Nursing (ECSACON)の学術大会に招待を受けており、アジア・アフリカ助産研究センターの活動をまとめ、発表する。</p> <p>助産修士課程の施行を目指し、前年度に開発した助産修士課程カリキュラム案をムヒンビリ健康科学大学に提出、承認を得る。</p> <p>日本側研究者チームがタンザニアを訪問し、国際学術ワークショップ「What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference –」のディスカッションセッションを通して、タンザニアにおける “Humanization of Childbirth”の概念をまとめる(本研究の実施に先立ち、日本・タンザニア両側から研究計画に対する倫理審査承認を得る)。</p>
<p>24年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>① 平成23年度の国際助産師連盟三年毎大会での本事業キックオフ発表において、他の途上国からも助産学の修士課程設置を望む声が上がっていた。本事業の過程を学会、学術誌発表することで、アジア・アフリカ助産研究センターの活動を周知するだけでなく、他国教育機関の発展に寄与することが期待できる。</p> <p>② モーリシャスの ECSACON 学術大会に派遣する若手研究者にとって、アフリカ研究者を前に発表し、意見交換を経験できる貴重な場となる。</p> <p>③ ムヒンビリ健康科学大学から助産修士課程設置の承認を得ることで、課程施工の第一歩を踏み出すことができる。</p> <p>④ 妊産婦死亡率の高いアフリカ・タンザニアの地における「Humanization of Childbirth」のコンセプトを記述し、研究者、臨床指導者と共有することで、共通理解に基づいたカリキュラムの実施を目指すことができる。</p>

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 23 年度	研究終了年度	平成 25 年度
研究課題名	(和文) タンザニアの思春期男女への性教育プログラムの評価: 都市部と農村部の比較				
	(英文) Sex education program for adolescent boys and girls in Tanzania: A comparative study between city and rural areas				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授				
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Sebalda Leshabari, School of Nursing, Professor				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	計 〈人/人日〉	
	日本 〈人/人日〉		1/30 (2/8)		1/30 (2/8)
	タンザニア 〈人/人日〉	0/0			0/0
	〈人/人日〉				
	合計 〈人/人日〉	0/0	1/30 (2/8)		1/30 (2/8)
	⑤ 国内での交流		0/0	人/人日	
日本側参加者数					
3 名	(12-1 日本側参加研究者リストを参照)				
タンザニア側参加者数					
1 名	(12-2 相手国タンザニア側参加研究者リストを参照)				
( ) 側参加者数					
名	(12-3 相手国( ) 側参加研究者リストを参照)				



<p>24年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>昨年度までに農村地区における性教育の計画書作成、地区の選定、倫理審査書類の作成までを行った。本年度は研究許可が下りた後、実際に性教育を実施し、評価研究を実施する。</p> <p>性教育は、バガモヨ地区において11-16歳の青少年を対象に紙芝居形式で行う。内容は先行研究でタンザニア都市部の少女を対象に使用されたものを用いる。</p> <p>評価研究には、すでに先行研究で使用の上修正された質問紙を用い、性教育の前後で知識、態度、行動に対する変化があったかを調査する。</p> <p>特に農村地区の青少年は性に対して閉鎖的であることが考えられるため、性教育の実施・評価質問紙の配布はタンザニア人助産師に依頼し、できるだけ対象が安全と感じる環境を設定できるよう注意を払う。</p>
<p>24年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>① タンザニアにおいては、若年妊娠の率が高く、安全でない中絶や、正期産に於いても合併症を伴う可能性が高いことが、妊産婦死亡率を高める要因となっている。また、HIV/AIDS感染の危険性を減らすためにも、性教育は重要である。特に、農村地区には正しい性に関する知識を得るためのメディアや情報リソースが欠けているため、若年層への性教育のニーズが高く、本研究によりそのニーズに応えることができる。</p> <p>② 学術的にも、タンザニア農村地区における性教育の先行研究は限られており、本分野において新たな知見をもたらすことができる。</p> <p>③ 聖路加看護大学修士課程修了生に共同研究のデータ収集の協力や専門知識の提供を行うことで、研究者がコンピテンシーを高める研究経験を積むことができる。</p> <p>④ 日本側若手教員も本研究に参加することで、タンザニアにおけるプロジェクトの実施、データ収集、分析過程の実際を学ぶことができる。</p>

## 8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「タンザニアにおける“人間的な”出産とは？－ブレインストーミングカンファレンス－」 (英文) JSPS AA Science Platform Program “What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference –”
開催期間	平成 24 年 9 月 1 日 ～ 平成 24 年 9 月 2 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、ダルエスサラーム、ホテル (英文) Tanzania, Dar es Salaam, Hotel
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授 (英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Khadija, Malima, School of Nursing, Dean and Professor

### 参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (タンザニア)	
日本 〈人/人日〉	A.	5/10
	B.	
	C.	
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	5/10
〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	5/10
	B.	
	C.	5/10

A. セミナー経費から旅費を負担

B. 共同研究・研究者交流から旅費を負担

C.本事業経費から旅費を負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>タンザニアではこれまで妊産婦死亡率の高さから、出産時の救急産科ケアや医療介入といった側面が強調され、医療機関での出産に対し不安、不信感を持つ妊産婦が多い。このため、現在でもタンザニア女性の約半数が専門家のいない自宅で出産しており、結果として妊産婦死亡率の改善も遅れている。</p> <p>そういった背景から、助産修士課程の中心概念となる「<b>Humanization of Childbirth</b> “人間的な出産”」を、日本の助産教育、助産実践を通してタンザニア教育関係者、学生、臨床助産師に周知し、妊婦死亡率改善への寄与を目指す。</p>		
<p>期待される成果</p>	<p>① 修士課程の中心的コンセプトである「<b>Humanization of Childbirth</b>」を、タンザニア教育関係者、学生、臨床助産師に浸透させることができる。</p> <p>② 日本の助産教育、助産実践をタンザニア側研究者、タンザニア教育関係者、学生、臨床助産師が学ぶことができる。</p> <p>③ 日本側研究者、日本側学生にとってもタンザニアにおける発表、討論の貴重な機会となり、妊産婦死亡率の高い、医療的な条件の整っていない場所での出産、異なった文化における出産を学ぶ機会となる。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>聖路加看護大学参加研究員、事務局 ムヒンビリ健康科学大学参加研究員、事務局</p>		
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 会議費 外国旅費 備品・消耗品 旅行保険 ビザ費用</p>	<p>金額 1,000,000 円 2,700,000 円 10,000 円 32,000 円 54,000 円</p>
	<p>タンザニア側</p>	<p>内容 通信・広告費 国内旅費</p>	
	<p>( ) 側</p>	<p>内容</p>	

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

#### ① 相手国との交流

派遣先 派遣元	日本 <人/人日>	タンザニア <人/人日>	<人/人日>	計 <人/人日>
日本 <人/人日>		5/10		5/10
タンザニア <人/人日>	0/0			0/0
<人/人日>				
合計 <人/人日>	0/0	5/10		5/10
② 国内での交流 0/0 人/人日				

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
聖路加看護大学・教授・堀内成子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	9月初旬	タンザニア助産修士課程を開始するにあたり、ムヒンビリ科学大学の教員・臨床指導助産師に助産修士レベルの達成目標、教授方法、コンピテンシーについてトレーニングを行う。
長崎大学・教授・江藤宏美	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	9月初旬	タンザニア助産修士課程を開始するにあたり、ムヒンビリ科学大学の教員・臨床指導助産師に助産修士レベルの達成目標、教授方法、コンピテンシーについてトレーニングを行う。
聖路加看護大学・助教・長松康子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	9月初旬	タンザニア助産修士課程を開始するにあたり、ムヒンビリ科学大学の教員・臨床指導助産師に助産修士レベルの達成目標、教授方法、コンピテンシーについてトレーニングを行う。
聖路加看護大学・助教・新福洋子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	9月初旬	タンザニア助産修士課程を開始するにあたり、ムヒンビリ科学大学の教員・臨床指導助産師に助産修士レベルの達成目標、教授方法、コンピテンシーについてトレーニングを行う。
聖路加看護大学・助教・飯田真理子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	9月初旬	タンザニア助産修士課程を開始するにあたり、ムヒンビリ科学大学の教員・臨床指導助産師に助産修士レベルの達成目標、教授方法、コンピテンシーについてトレーニングを行う。

## 9. 平成24年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉	モーリシャス 〈人／人日〉	〈人／人日〉	〈人／人日〉	合計
日本 〈人／人日〉		11/50 (6/16)	1/5			12/55 (6/16)
タンザニア 〈人／人日〉	0/0					0/0
〈人／人日〉						
〈人／人日〉						
〈人／人日〉						
合計 〈人／人日〉	0/0	11/50 (6/16)	1/5			12/55 (6/16)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は( )をのぞいた人数・日数としてください。)

### 9-2 国内での交流計画

1/3	〈人／人日〉
-----	--------

## 10. 平成24年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	50,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	3,056,000	
	謝金	254,000	
	備品・消耗品購入費	42,000	
	その他経費	1,431,000	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	167,000	
	計	5,000,000	研究交流経費配分額以内であること
委託手数料		500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		5,500,000	

## 11. 四半期毎の経費使用見込み額及び交流計画

	経費使用見込み額 (円)	交流計画人数<人/人日>
第1四半期	80,000	1/3
第2四半期	4,760,000	12/54(6/16)
第3四半期	0	0
第4四半期	160,000	0
合計	5,000,000	13/57(6/16)